

田坂広志の風を語る

地球環境問題が深刻化する時代。日本は、その最先端の環境技術で、世界に貢献をすべきであろう。しかし、日本が世界に貢献すべきは、「優れた環境技術」だけではない。同時に、日本独自の「成熟した環境思想」を世界に届けていくべきであろう。その一つが、「共生」から「自然」への深化。その「新たな時代の風」を、田坂教授が語る。

TOPIC 「共生」の思想を超え 日本独自の「自然」の思想へ

日本が世界に届けるべき 環境思想

灰塚 近年、世界全体で異常気象が頻発し、地球温暖化を始めとする地球環境問題への懸念が深まっていきます。こうした時代において、日本の世界に対する貢献は、どうあるべきなのでしょう？ この日本という国は、江戸時代、ロンドンやパリで下水も整備されていなかった頃、すでに世界でも最高水準の環境共生都市を実現していました。現在も、日本の環境技術は、世界でも最先端であり、こうした技術の輸出も、世界に対する貢献と思えますが。

田坂 その通りですね。日本が、その最先端の環境技術で世界に貢献できることは明らかです。ただ、日本が世界に提供すべきは、環境技術だけではなくありません。その「優れた環境技術」の背後にある、「成熟した環境思想や環境文化」も世界に伝えていくべきでしょう。
灰塚 その「成熟した環境思想や環境文化」とは何でしょうか？ ノーベル平和賞を受賞したマタイさんが、かつて世界に紹介してくれた「Mottainai（もったいない）」

などの思想でしょうか？

田坂 その思想も、世界全体で資源節約が求められる時代において、海外に届けるべき日本の優れた環境思想でしょう。ただ、日本の成熟した環境思想の本質は、もっと深いところにあるのです。

灰塚 もっと深いところとは？

田坂 先ほど灰塚さんは、「環境共生都市」という言葉を使われましたが、この「共生」という言葉は、世界の環境運動や環境思想において、必ず使われる言葉です。しかし、実は、日本は、この「共生」という言葉よりも、さらに深い思想を育んできた国なのですね？

灰塚 それは、どのような思想でしょうか？

「共生」を超える 「自然」の思想

田坂 「自然」（じねん）という思想です。これは、実は、日本の環境思想や環境文化の根底にある、日本独自の深いある思想です。

灰塚 その「自然」という言葉は、仏教思想において「自然法爾」などの言葉として使われていますね。たしかに、日本人は、「人為」によって

何かを為すことに最高の価値を置かず、「大いなるもの」に導かれて物事が自ずと然る「自然」と呼ぶべき状態に最高の価値を置いてきました。では、「共生」の思想と「自然」の思想は、何が違うのでしょうか？

田坂 その違いは、英語で表現すると分かりやすいですね。
しばしば、「自然との共生」という言葉が使われますが、これを英語で言くと「Living with Nature」です。一方、「自然」は、英語で言えば「Living as Nature」です。

灰塚 なるほど、「with」と「as」の違いですね……
田坂 そう、「共生」は「with」、すなわち「自然と共に生きる」ですが、「自然」は「as」、すなわち「自然として生きる」です。

灰塚 その違いは大きいですね。
田坂 そうです。すなわち、日本の環境思想は、そもそも自然と人間を対立的なものとして捉えていないのです。人間も自然の一部であり、大いなる自然の中で、その一部として生かされているという思想なのです。これに対して、欧米の環境思想は、自然と人間を対立的なものとして捉え、「いかにして自然を征服する

田坂広志

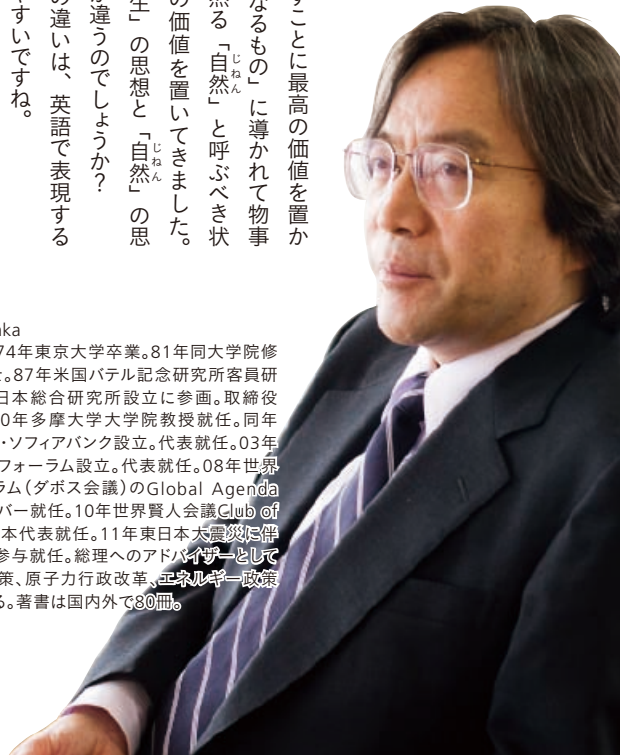
Hiroshi Tasaka
1951年生。74年東京大学卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国バテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立に参画。取締役等を歴任。00年多摩大学大学院教授就任。同年シンクタンク・ソフィアバンク設立。代表就任。03年社会起業家フォーラム設立。代表就任。08年世界経済フォーラム（ダボス会議）のGlobal Agenda Councilメンバー就任。10年世界賢人会議Club of Budapest日本代表就任。11年東日本大震災に際し内閣官房参与就任。総理へのアドバイザーとして原発事故対策、原子力行政改革、エネルギー政策転換に携わる。著書は国内外で80冊。

か」という発想が根底にあるのです。それゆえ、実は、「共生」≡「自然と共に生きる」という言葉には、自然と人間を対立的に捉える「二項対立的な発想」が、密やかに忍び込んでいるのですね。

密かに忍び込む 「人間中心主義」

灰塚 たしかに、日本という国の文化には、本来、「自然を征服する」という発想は無いですね。しかし、最近では、その日本にも、自然と人間を対立的に捉える「二項対立的な発想」が、無意識に忍び込んでくるように思います……

田坂 そうですね。それを象徴する





言葉の一つが、「地球に優しく」という言葉でしょう。この言葉は、一瞬とても良いことを言っているように感じますが、実は、密やかな「人間中心主義」の言葉ですね。

灰塚 「人間が地球を破壊できる」「人間が地球を救うことができる」という発想そのものが、密やかな人間中心主義であり、人間の無意識の傲慢さだということですね……。

田坂 それと同じことを、以前、臨床心理学の河合隼雄さんも言われていました。そして、かつて、「ガイア思想」の提唱者であるジェームズ・ラブロック博士と対談を行ったとき、博士は、「地球温暖化で地球が困る」とは無い。地球は、46億年の歴史の中で、極めて高温の創生期から極めて低温の氷河期まで経験してきている。困るのは人類自身だ」と述べていました。

灰塚 語られるべきは「地球に優しく」という言葉ではなく、「人間に優しく」という言葉なのですね……。

一神教と多神教・自然崇拜の環境観
灰塚 では、そもそも、こうした欧米の「自然と人間を対立的に捉える思想」は、どうして生まれてきたのでしょうか？

田坂 やはり、一神教の影響が強いでしょう。一つの神を、絶対的な立場に置くという思想は、無意識に、

人間を特別な立場に置くという思想に結びついていきます。これに対して、日本という国は、「八百万の神」という言葉に象徴されるように、本来、多神教の国であり、仏教思想においては、「山川草木国土悉皆仏性」という言葉が語られるように、自然のすべてに仏性が宿るといって、洗練された「アニミズム（自然崇拜）」の思想が根付いている国です。

灰塚 たしかに、日本は洗練された自然崇拜の国ですね。
田坂 そうです。仏教思想では、「風にも仏性が宿る」と言われますが、私のメッセージメールに「風の便り」という名をつけ、この連載のタイトルに「風を語る」という名をつけているのは、実は、そうした思想への共感からです。

「和魂洋才」を忘れた日本の姿
灰塚 しかし、自然と人間を対立的に捉える欧米では、その自然を征服するために、科学技術が発達しましたね。日本という国は、その欧米から科学技術を取り入れて繁栄してきた国ですが、欧米の科学技術を、さらに取り入れていくとき、何を大切にすべきなのでしょう？

田坂 昔からこの国には、「和魂洋才」という言葉があります。この言葉の如く、欧米の科学技術（洋才）を取り入れるとき、自然と人間は本来一

体であるという思想（和魂）を、その科学技術に込めていくということが、日本の歩むべき道でしょう。そして、そうした「和魂洋才」を実現することは、日本という国の歴史的使命でもあると思います。

灰塚 「歴史的な使命」ですか……。
田坂 そうです。歴史的に見るならば、西洋文明中心の20世紀を終え、21世紀は、東洋文明が復活し、西洋文明との壮大な融合が起こる時代と

思います。そのとき、東洋の国々の中では、最も早く、西洋の科学技術や資本主義を取り入れてきた国である日本が、世界に対して果たすべき役割があります。21世紀における東洋文明と西洋文明の融合を実現する場となるという役割です。

灰塚 その一つの具体的な道が、最先端の環境技術に、日本の成熟した環境思想を融合させ、世界に届けるということですね。

田坂 そうです。ただし、「和魂洋才」という言葉は誰もが知っている言葉ですが、それを実践するのは、決して容易ではありません。なぜなら、近年、日本人の多くが、そもそも「和魂」とは何かについて、忘れてしまっているからです。

灰塚 たしかに、過去、日本が中国から漢字や仏教を取り入れ、江戸時代、蘭学などを学んだときには、その「和魂」の部分を決して失うことは無かった

ですね。

田坂 さらに言えば、かつて、欧米から資本主義を導入したときも、独自の思想や文化を持つ「日本型資本主義」として、深化・成熟させてきました。しかし、グローバル化の

風の中で、残念ながら、資本主義においても、その「和魂」の部分が見失われつつあります。だからこそ、我々は、いま、日本という国の文化や、思想、精神を深く学ばなければならぬのです。海の彼方を見つめるよりも、足下の大地を見つめるべきなのでしょう。

灰塚 その一つの視点が、環境思想において、「共生」という発想を超え、「自然」という思想へと深めていくことなのですね。

有り難うございました。

インタビュー 灰塚 鮎子
 Ayuko Haittsuka
 経営者。株式会社新潮社、雑誌編集を経て、株式会社Elephant設立。心に注目した多様性社会におけるマネジメント手法HARDIAL（ハーディアル）を展開。また著述家としての一面も持ち、自身の哲学および四季折々の自然や心の有り様を、抒情的に現した詩を執筆。また目に見えない心の重要性や心を感じるコミュニケーションをテーマとしたコラムを担当。西日本新聞夕刊「わたし活性化計画」、WEBサイト：Fan Fun FUKUOKA「something special」に連載中。

